

「辞をもって人を尽くさず」という。人の評価は言葉のよしあしのみで下すのではなく、その行動が言葉どおりかどうかで判断すべき、ということだ。むろん言葉を知ること大切だが、実践が伴わぬ限り本当に知ったことにはならない。「言行一致」である。

\*第20回臨時株主総会・臨時取締役会\*

新常務取締役役に木下 康氏(九州電力理事)

【7月1日=本店】 当社は、去る7月1日午後2時から本店会議室に於いて第20回臨時株主総会並びに臨時取締役会を開催し、取締役1名が新たに選任されました。新取締役には、常務取締役として木下 康氏(九州電力株式会社理事・前原子力建設部長)が選任されました。また、業務担当および業務委嘱の一部変更についても決議されました。なお、当社の新経営陣は以下のとおりです。

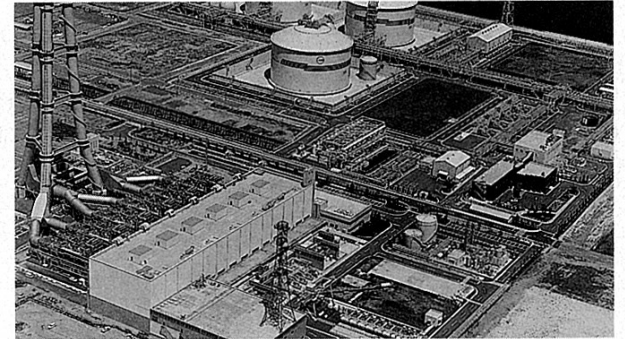


木下 新常務取締役

代表取締役社長	久米 一郎	
専務取締役	東 宗利	経営全般担当
常務取締役	弘永 英明	技術、火力、原子力、安全担当 [担当変更] (技術部長)
常務取締役	木下 康	営業、業務、建設、開発工事担当 [新任] (営業部長)
取締役	赤司 喜照	(経理部長)
取締役	浦島 堅吾	(火力部長)
取締役	田中 光生	(総務部長兼企画部長)
取締役	西山 英輔	(東京営業所長)
取締役	丸山 一美	(建設部長) [業務変更]
取締役	白石 晶一	
取締役	古賀 圭二	
監査役	山下 芳朗	

=大分建設所=

新大分1号系列、営業運転を開始



【6月20日=大分】 九州電力株式会社新大分発電所1号系列(出力69万KW=11.5万KW×6基)は、さる6月20日に通産局の使用前検査に合格し、営業運転を開始しました。

同発電所は、九州電力㈱最初のコンバインドサイクル発電方式を採用したLNG火力発電所。同方式はガスタービンの排熱を利用することで、従来の火力発電よりも高い発電効率を得られ、さらに起動停止時間が短く、出力調整も容易なため、急な電力需要の変化にも素早く対応できるようになっています。

同工事において当社は昭和63年4月に建設所を開設し、鋭意作業にあたってきました。開設以来連続無災害記録を続け、この7月で1,200日を越えました。また、隣接する新大分事業所ではこの9月から同発電所の定修工事を順次(6基の間の1基毎に)行う予定になっています。

今回の1号系列に続いて、2号系列もすでに建設が進む同発電所ですが、この夏の電力需要のピークに向けて、その活躍が期待されます。(大分建設所:河野通信員)

☆夏季安全推進期間☆ <7月1日~8月31日>

スローガン “一人ひとりが安全確認を励行し

類似災害を撲滅しよう”

当社では、今年も例年どおり7月1日から8月31日までの2カ月間を、“夏季安全推進期間”と定め、スローガン「一人ひとりが安全確認を励行し、類似災害を撲滅しよう」を掲げて、諸活動を展開しています。

これは、日常発生する危険要素と、夏の暑さからくる不安全行動、不安全状態などの危険要素を、作業指示の徹底、危険予知活動の充実、健康自主管理の啓蒙等の安全衛生活動を積極的に展開することによって徹底排除し、この時季を無事故・無災害で乗り切ろうと、全社を挙げて推進しているものです。

なお、実施事項の詳細は第2面に掲載しています。

☆現業機関の設置☆

荻田事業所、玄海原子力(建)二次系作業所が設置される

平成3年7月1日付けで、下記の現業機関が設置されましたのでお知らせいたします。

記

○豊前事業所荻田事業所

〒800-03 福岡県京都郡荻田町長浜町1番地

○玄海原子力建設所二次系作業所

〒847-14 佐賀県東松浦郡玄海町大字今村

九州電力株式会社玄海原子力発電所構内

=随 想=

“ 雑 感 ”

湾岸戦争も、戦いの大きな爪痕を残し終息し、はや数か月を経過したが、戦後処理はいままお続いている。勝った、負けた、善し悪しなどは別として、戦争がもたらしたものはなんだろうか。膨大な戦費・復興費はもとより、残された人々は涙し、資源を失い、海洋汚染、大気汚染も引き起こした。

さて今回の戦争で、最も懸念、最も恐れられたものが三つあったと思われる。つまり、

- 一、化学兵器・生物兵器の使用
  - 二、イスラエルの戦争への介入
  - 三、油の流出と火災
- 一つめは、技術がなかったのか、生産されていなかったのか、使う

機会を失ったのか、ともかく使用されなかった。

二つめは、たび重なるスカッドミサイル打ち込みに対しパトリオットミサイルの迎撃などによってイスラエルは耐えしのいだ。

以上二つのが回避されたことで世界中の人々はほっとしたに違いない。

三つめについては、各メディアを通じてこれでもか、と茶の間に届けられたのでよくご存じだと思うが、油の海にあえぐ水鳥、六百数十本におよぶ油井火災。その様には思わず目をそむけ、怒りを感じたものである。海洋汚染処理は各国の技術でもって処理すれば何



大分事業所長

城 後 文 人

とかなりそうだが、油井火災については、貴重な資源が今もなお無駄に燃え続け、その消火にも高度な技術と時間を要すると聞く。世界中が省資源・環境汚染防止に努めているなかで、許せないことである。戦争とはこんなものだ、と思っはみても、やはりやり切れない思いである。

話はあるが、第二次世界大戦中に少年時代を過ごした私は、当時の記憶として、楽しかったことよりも苦しかった思い出のみが脳裏に浮かんでくる。小学3年の頃から空襲が頻繁になり、通学できない日が多く、農繁期の勤労奉仕や校内外の農作業など、それぞれ学年に合った奉仕作業がほとんどであった。

ちょうど小学校6年の時に戦争は終わったが、戦中・戦後とも物資の欠乏がひどく、教科書や衣類など先輩や兄貴ゆずりのもので、新しいものなどはほとんどなかったように思う。

また食生活なども惨澹たるもので、甘いものなどほとんど口にすることもできず、いつも空腹を感じていたものだった。食べたいものも食べられず、「すきっ腹にま

ずいもの無し」の耐乏生活で、何が好きとか何が嫌いとか言える時代ではない中で、病氣らしい病氣もせず「薬より養生」のたとえはまさにこのことを指していたように思う。戦争で得たものは、荒廃した国土と就職難、物資の欠乏と空腹を抱えての耐乏生活であった。

時の経過とともに、この国も次第に復興を遂げていったが、あの終戦当時、誰が今の平和で豊かな様を想像したであろうか。この繁栄は、戦後40数年において国民の英知と勤勉さを土台として苦しみに耐えて得たものであり、この事実を忘れず、二度と繰り返すことがないよう戦争の悲惨さを後世に伝えていきたい。我が国が福祉国家としてさらに繁栄し、世界平和に寄与できるよう願ってやまない。